日本宗教学会 第85回学術大会
パネル発表要旨集

学術大会　　会期：2026年9月11日(金)－13日(日)　　会場：東北大学 川内北キャンパス

開催パネル一覧　　場所：C棟 1～3階 各会場

9月12日（土）13：30～	パネル題目	代表者
第1部会	危機の時代の宗教学－20世紀政治思想との交錯－	江川　純一
第2部会	柳川啓一は何を残したのか－生誕100年記念パネル－	竹沢尚一郎
第3部会	日本における暦と近世・近代宗教史	岡田　正彦
第4部会	2024年能登半島地震における災害復興と宗教文化	井川　裕覚
第5部会	宗教実践におけるAIの活用について	木村　武史
第6部会	Teaching Japanese Religions to International Students	KOBAYASHI Naoko

9月13日（日）13：30～	パネル題目	代表者
第1部会	『神秘的経験の諸相』を読む	葛西　賢太
第2部会	井筒哲学の比較宗教学的探究	澤井　義次
第3部会	〈憲法作者〉としての聖徳太子－日本宗教史の視座から－	オリオン・クラウタウ
第4部会	更新される定義から考えるスピリチュアルケア	山本佳世子
第5部会	宗教文化とAI利用－知識・言語・表現・語りの現在－	石田　友梨
第6部会	日本の近現代の巡礼から「衰退」の言説を再考する	ケイレブ・カーター
第7部会	宗教（史）観の戦中と戦後－キリスト教・真宗・禅と「日本」－	飯島　孝良
第8部会	ユニヴァーサリズム的霊性思想運動とアジア主義	荘　　千慧
第9部会	信仰の内と外の対話－当事者性と公共性のあいだ－	溪　　英俊
第10部会	谷口雅春の実相哲学の内包と外延	喜多　源典

パネル趣旨本文は、提出された原稿をそのまま掲載するのを原則としています。

危機の時代の宗教学－20 世紀政治思想との交錯－

代表者：江川　純一
トレルチの政治思想と宗教理念の比較研究　野川　　祈（東大）
ファン・デル・レーウの宗教理念と戦後社会思想　久保　大生（東北大）
ペッタッツォーニの宗教史学と政治思想　江川　純一（東大）
エリアーデの神話創作と政治思想　奥山　史亮（北海道科学大）
コメンテータ：深澤　英隆（一橋大）
司会：江川　純一

「宗教」概念を用いて古今東西の事象を総合的に把握しようとした、20 世紀前半の宗教学者たちは、いかなる世界・国家・社会を思い描き、その実現のために行動したのか。さらに、彼らの政治・社会思想とそれぞれの学はどのように関係するのか。本パネルにおいて対象とするのは、ドイツのエルンスト・トレルチ（1865-1923）、オランダのヘラルドゥス・ファン・デル・レーウ（1890-1950）、イタリアのラッファエーレ・ペッタッツォーニ（1883-1959）、ルーマニアのミルチャ・エリアーデ（1907-1986）である。彼らの学問の背後に横たわる政治思想、社会思想を分析することで、学問と政治思想の相関を明らかにしたい。

野川は、神学者エルンスト・トレルチの政治思想および宗教理念について発表する。トレルチは連載エッセイ『観察者の書簡』を通して第一次世界大戦の戦況を分析し、また国民のナショナリズムを鼓舞する論説を発表した。しかし一方で、己の信仰に基づいた妥協・平和のキリスト教神学をも貫いた。戦時中のこれらの姿勢にあらわれるトレルチの政治思想と宗教理念を比較し、信仰を持つ宗教思想家として彼がどのように未曽有の大戦と対峙したのか、またその学問に大戦がどのような影響を及ぼしたのかを論じる。

久保は、ヘラルドゥス・ファン・デル・レーウの戦後の社会思想に焦点を当てる。彼は 1930 年前後から文化批判的な論考を著すようになり、戦後の臨時内閣では教育・芸術・科学大臣に任命された。国民の精神的復興を期待される立場となり、オランダ国民のあるべき姿を説く著作を発表した。そこには、レーウの宗教理念が強く表れている。本発表では、彼の社会思想とそこに深く結びつく宗教理念を分析し、レーウが社会の中に宗教をどう位置づけようとしたのかを明らかにすることで、彼の学問と社会思想の関係性を問いたい。

江川は、本年、本邦初の翻訳書が刊行されたラッファエーレ・ペッタッツォーニを取り上げる。彼は社会主義運動のなかでローマ・カトリック教会から離れ、ファシスト政権下の国立大学で研究・教育活動を行い、戦後は信教の自由擁護運動に取り組んだ。ペッタッツォーニの政治・社会思想と、その学問との連関の分析は、20 世紀前半のイタリアの状況を理解するうえでも欠かせない。1922 年までの自由主義期、1945 年までのファシズム期、1946 年以降の共和制期を生きたペッタッツォーニのなかで、変化したものと変化しなかったものを明らかにすることで、彼の宗教史学を問い直したい。

奥山は、ミルチャ・エリアーデの文学創作に着目し、彼の政治思想に検討を加える。戦中のエリアーデが民族主義の渦中に身を置き、戦後は対ソ運動のイデオローグとして活動したことはよく知られている。また彼の文学作品がその学問と強い連関を有することもＩ・Ｐ・クリアーヌ等が生前より指摘してきた。それらを踏まえた上で、エリアーデがゴシックホラーやフォークロアを取り入れながら文学を「現代世界の神話」として創作していった過程を分析し、その学問によって如何なる世界を描こうとしたのか明らかにすることで、エリアーデの宗教学思想を再考する。

四名の発表を受け、深澤がドイツ研究と日本研究の知見をもとにコメントを行う。

以上の作業は、取り上げる宗教学者たちの他者理解や異文化理解を明らかにすることにも繋がる。テクストとその政治的・社会的コンテクストの関係を探り、19～20 世紀の宗教学思想の内実を再考する。

柳川啓一は何を残したのかー生誕 100 年記念パネルー

代表者：竹沢尚一郎

柳川啓一と祭り研究　関　一敏
柳川啓一と人類学　竹沢尚一郎（国立民博）
柳川啓一とイニシエーション　島田　裕巳（東京通信大）
コメンテータ：山﨑　亮（島根大）
司会：竹沢尚一郎（国立民博）

今年は、故柳川啓一東大名誉教授の生誕 100 年にあたる。1948 年に東京大学文学部宗教学宗教史学専攻を卒業した柳川は、1960 年に同助教授として採用され、1973 年に教授になり、多くの学生・院生の指導にあたった。柳川は学徒動員で工場に勤務したとき、ヴェーバーの『プロテスタンティズムと資本主義の精神』とデュルケームの『宗教生活の原初形態』の翻訳をもっていったとされ、それが彼の終生変わらぬ関心になった。方法論的には実証主義であり、分野としては宗教社会学と宗教人類学である。本パネルでは柳川の指導を直接受けた関一敏・竹沢尚一郎・島田裕巳の 3 名が、柳川の 26 年にわたる東大での研究活動と教育活動を振り返りながら、彼が日本の宗教学および学界に何を残したかを振り返りたい。

本パネルでは、まず関一敏が柳川啓一の祭り研究の展開とその宗教学的可能性について述べる。柳川の祭りへの関心は、1960 年代後半から 70 年代に集中している。日本の神々をめぐる宗教現象に「信仰のない宗教」という逆説的なありかたを指摘し、宗教のもうひとつの極である「行為（祭り）」の解析に日本の宗教学の活路を開こうとした。具体的には祭りの 3 つの解釈論（つながり・ドラマ・矛盾の併存）をへて、学会講演での「祭りの感覚」研究の提案にいたる。柳川個人の研究史では 50 年代のタルコット・パーソンズ研究からの転回が顕著ともみえるが、行為論からの宗教研究のひとつの究極体としてはたんなる転回ではない。柳川の進み方には 1930 年代以降の人類学・社会学の学説史的展開に相即した面と離脱した面があり、現在時の宗教学の可能性をその足跡に読みこんでみたい。

つぎに竹沢尚一郎が、柳川啓一と人類学の関係について話す。1960 年代のパーソンズ的な機能主義的宗教研究から出発した彼は、70 年代になると人類学で主流となりつつあった構造主義、象徴人類学へと関心を移していき、ヴィクター・ターナーやクリフォード・ギアツらの研究方法の導入につとめた。理論研究を重視した柳川であったが、その一方で 1950 年代の山岳信仰研究から、祭り研究、地域研究、新宗教研究と、毎年のように学生・院生とともに宗教の実証的研究に従事した。彼は人類学の参与観察ならぬ「参与解釈」を提唱したが、共感的理解を重視したその方法は、調査者の特権的地位を解体しようとするポストコロニアル人類学と歩調を合わせるものであった。反面、観察という距離の設定を拒んだことから、同化主義に転ずる危険性ももっていた。

最後に島田裕巳は、大学で最初に受けた柳川の授業が「イニシエーション」を扱ったものであったことにふれ、柳川の研究において、この概念がどういった重要性を持っていたかにふれる。柳川は、当初、宗教社会学の理論的な構築という方向性を示していたものの、1960 年代後半に世界的に生じた学生叛乱という時代状況のなかで、熱狂を伴う祭の研究や、当時台頭したまったく新しい宗教運動へ関心を寄せるようになった。それは、柳川の親友であるアメリカのロバート・ベラーの影響もあり、社会構造のなかに取り込まれることのない宗教の可能性を見出そうとする試みに発展していく。そうした研究はどういった成果をもたらし、また問題をはらんでいたのか。それについて論じる。

コメンテータの山﨑亮は、柳川啓一の教えを直接受けたことはないが、デュルケームについて博士論文と著書を出版するなど、宗教社会学・宗教人類学を専門としており、柳川と研究関心が大きく重なっている。本パネルの 3 名の発表は、柳川の業績と研究方法を過去のものとして記念＝埋葬するのではなく、今日の宗教研究にいかなる可能性をもたらしうるかを検証しようとするものである。

日本における暦と近世・近代宗教史

代表者：岡田　正彦
日の吉凶の選別と天文地理の学知－西川如見を中心に－　馬場真理子（国立歴民博）
平田篤胤における古暦探究　林　　淳（東洋大）
近世における梵暦学の隆盛と近代仏教　岡田　正彦（天理大）
明治改暦と神社例祭日の再編　下村　育世（青森公立大）
コメンテータ：中牧　弘允（国立民博）
司会：岡田　正彦（天理大）

「暦」は、おもに地球や太陽や月の運行の周期とその組み合わせをもとに、年・月・日などの時の流れや季節の変化を算定・記録する暦法とともに、特定の暦法に従って推算された時候や年中行事などの時令を記す媒体一般（暦本・暦書）を含む極めて広い概念である。また、暦に記される時候や年中行事は、農事や祝祭日といった人々の生活と密接に関わる情報と結びついており、日の吉凶を定める選日法や占星術とも切り離せない。

日本における「暦」研究のパイオニアである渡邊敏夫は、ストイックに市井に埋もれていた暦本・暦書のみを収集して整理する姿勢を貫いたが、それでもその資料群は膨大である。その探求の範囲を暦法や暦注などの背景にある思想や文化に広げるなら、暦の研究は宗教史や社会史につながる芳醇な研究領域を包含することになるだろう。

このパネルでは、こうした多彩な暦研究の一端を個々の研究者の研究分野に即して紹介し、それらを近世・近代日本宗教文化史、社会史の文脈に位置付けることを通して、暦研究が宗教研究の領域において果しえる可能性について考えたい。

馬場は、長崎の天文地理学者である西川如見（1648-1724）が著した『教童暦談』（1714）およびその増補版（1716）を中心に、近世における暦注（日の吉凶）をめぐる言説の一様相を示す。発表者はこれまで、貞享改暦（1685）を機に、僧侶による暦注書が減少したことを指摘してきた。その一方で、如見は暦注の諸項目を解説しつつ、その根拠を批判的に問い直す姿勢を随所に示すが、暦注すべてを否定するのではなく天文地理の学知に基づきながら、一部の暦注には正当性を認める。ここでは、僧侶以外の書き手が暦注の解釈者として台頭する中、天文地理の新たな学知が暦注の取捨選択における一基準として機能していたことを論じる。

林は、今までの平田篤胤研究では取り上げられなかった『天朝無窮暦』などの暦関連の著作を読み解き、これまで見落とされてきた渋川春海の『日本長暦』の影響について考察する。『日本長暦』では神武天皇が作成した古暦が実在し、中国暦の受容以前には使われていたことが論じられている。篤胤は、古暦という発想を継承して伊弉諾尊・伊弉冉尊が作成した暦が、大国主命によって中国にもたらされて中国の最古の暦となり、同一の暦が日本の朝廷において天朝無窮暦として伝承されたとする。このようなグランドセオリーをふまえて、本発表では篤胤の古暦探究が何をめざしていたかを問う。

岡田は、貞享の改暦以来、西洋天文学の新たな知見にもとづいて改暦をくり返した近世後期の知的布置のもとで、仏典中の天文学的知見を背景にした「須弥界」の暦法（梵暦／仏暦）を提唱し、独自の改暦と暦の頒布を行なった梵暦学の隆盛とその近世・近代仏教思想史上の意義について考える。梵暦法の提唱者である普門円通や門弟たちの多くは、仏教各宗派内においても影響力のある学僧たちであった。これまで、本格的に研究されることのなかったかれらの宗派内での活動に焦点をあてながら、梵暦学の隆盛の意義を再考したい。

下村は、明治 6 年の明治改暦により、それまで暦に掲載されてきた陰陽道に基づく日の吉凶を示す暦注は削除され、生活に深く根ざしていた五節句の祝いも禁止された一方で、新たな暦には、皇紀紀元、元始祭など皇室にかかわる祝祭日、歴代天皇（神武から孝明天皇まで）の忌日、神社の例祭日などが掲載された事実をふまえて、神社の例祭日を主たる対象とし、暦への掲載そのものではなく、改暦を契機に「伝統」とされた祭日の日取りがいかに再編され、いかなる過程を経て定着したのかについて、複数の推算類型とその調整過程に着目して検討する。

コメンテータは、宗教研究をふまえた暦研究に先鞭をつけたパイオニアである、中牧弘允がつとめる。宗教研究における暦研究の意義について、有益な提言がなされることを期待したい。

2024 年能登半島地震における災害復興と宗教文化

代表者：井川　裕覚
災害復興における仏教系 NGO の活動と地域レジリエンスの構築　朴　慧晶（東北大）
能登半島地震におけるキリスト者の災害・復興支援をめぐって　桑野　萌（清泉大）
臨床宗教師による地域ケアから被災地支援への展開　井川　裕覚（東北大）
宗教性、身体性、生きる力ー能登の祭りから考えるー　小西　賢吾（京大）
コメンテータ：木村　敏明（東北大）
司会：井川　裕覚（東北大）

本パネルの目的は、2024 年能登半島地震後の復興支援において、宗教集団および宗教文化が地域関係の再編に果たした役割を検討することである。能登半島地震では、道路・住宅・ライフラインといった物理的インフラの復旧のみならず、人びとのつながりや地域関係の再構築が大きな課題となった。過疎高齢化が進行する能登地域では、震災以前から地域社会の基盤そのものが脆弱化しており、災害は既存の社会的孤立や共同体の弱体化をさらに加速させた。他方で、能登では地域固有の宗教文化が、人びとの相互扶助や関係性を支えてきた歴史を有している。震災後には、宗教系 NGO や支援団体、臨床宗教師など、多様な宗教集団・宗教者が支援活動に参与し、被災地における関係性の再編に重要な役割を果たしている。こうした状況は、災害復興を生活再建やインフラ復旧の視点から捉えるだけでなく、地域復興における関係性や文化的実践の意義を捉える必要性を示している。本パネルでは、被災地における人びとのつながりや地域社会の再編過程において、宗教集団・宗教文化が担う役割を明らかにする。

発表１（朴）では、能登半島地震における公益社団法人シャンティ国際ボランティア会（SVA）の活動を事例に、仏教系 NGO による災害支援が地域レジリエンスの構築にいかに寄与するかを検討する。その際、災害復興の過程で被災地のニーズが時間の経過とともに複雑かつ動的に変化する「ダイナミズム」に着目する。とくに SVA の移動図書館活動に着目し、仏教系 NGO がいかに地域コミュニティの再編に関与し、社会的つながりを回復するいかなる機能を担っているかを分析する。さらに、地域に根ざした「宗教」および「文化」の要素を「防災」の枠組みと統合することの重要性を提示し、宗教学的な知見と防災実践を融合する可能性を議論する。

発表２（桑野）では、カリタスのとサポートセンターの復興支援を事例に、地域社会と宗教との関係や、カトリック教会が有する世界的ネットワークに注目し、復興支援における宗教の役割を問う。とくに土着の宗教と外来宗教との違いに着目し、キリスト教の能登地域との関わりについて検討する。さらに、キリスト教における支援活動の原動力となる「境界なき隣人への愛」（隣人愛）の教えについて確認し、支援活動と「（福音）宣教」の関係をどう捉えるのかについて問題提起を行う。

発表３（井川）では、能登半島地震後の臨床宗教師による傾聴カフェ活動を対象に、宗教者によるケア実践の展開を検討する。大震災以前から地域で継続されてきた認知症当事者と家族を対象としたケア活動と臨床宗教師との協働に着目し、被災地において宗教ネットワークを活用したケア活動がいかに展開されたのかを分析する。臨床宗教師が地域住民や既存の地域活動と連携しながら、被災者への「心のケア」や居場所の構築に関与している実態を明らかにする。

発表４（小西）では、能登の祭りに着目し、それが人びとの心の復興や「つながり＝縁」の再構築にいかなる役割を果たすのかを明らかにする。能登半島地震の復興指針において、祭りは能登文化の象徴として位置づけられてきた。本報告では、多様な人びとをつなぎ、「生きる力」が発露する場としての祭りの側面に着目する。発表者が調査を継続してきた能登島の事例を中心に、パンデミックや地震を経ても祭りが存続してきた背景を、祭りの宗教性、とくに能登におけるカミ概念との関わりと、神輿や獅子舞にみる身体性、集合的身体の形成と継承という観点から考察する。さらに、祭りを通じた縁の再構築が身心のケアにつながる可能性についても論じる。

コメンテータの木村敏明は、東日本大震災の当事者として災害人文学研究に取り組み、またインドネシアにおける災害と宗教文化の関わりを専門とする立場からコメントを行う。

宗教実践における AI の活用について

代表者：木村　武史
創価学会における AI の活用事例　井上　大介（創価大）
神道における AI の活用事例　黒崎　浩行（國學院大）
スピリチュアリティ実践者における生成 AI 利用の調査と分析　堀江　宗正（東大）
イスラームの教義回答（ファトワー）における生成 AI 活用の試み　塩崎　悠輝（静岡県立大）
コメンテータ・司会：木村　武史（筑波大）

近年の生成 AI の成功は、社会の隅々にまで浸透し、その影響は宗教界にも見られ始めている。宗教実践における AI の利用には、他の社会領域にはない特有の問題があると考えられるが、具体的な問題は各宗教によって異なってくる。本パネルの意義は、国内外の事例を基に、宗教実践における AI 利用の実情と問題点を探り、現代グローバル社会における宗教と技術の問題に新たな論点を提示することにある。

井上大介は「創価学会における AI の活用事例」の題で以下の内容を発表する。創価学会における AI の活用事例について、現在、同組織で推進されている SOKA D.I.SEARCH と称する AI 活用の事例を題材に、教団における取組の概要、信者における活用状況、活用を通じた信仰解釈という３つの点についてインタビューおよび質問紙調査を通じて整理する。具体的には、聖性をはじめ、教義や信念体系、組織への意識、幹部への信頼、集団的儀礼と関わる身体性、信仰体験や信仰心の深化、信仰の持続、後継者への信仰継承といった宗教運動において重要な諸特徴が、AI の活用によってどのように変化するのか、といった点について情報を集約し、その結果およびそれに関する考察の一部を報告する。

黒崎浩行は「神道における AI の活用事例」の題で以下の内容を発表する。近年、生成 AI が日常生活やビジネス、創作等に浸透していく中で、意図的か非意図的かを問わず、捏造・フェイク情報の拡散などの問題も浮上しており、生成 AI 利用にあたっての倫理やリテラシーの確立が求められている。神社神道においてはインターネットが普及しはじめた 1990 年代後半から、神社信仰の尊厳を保つために慎重な利用を呼びかける動きがあった。だが 2010 年代からは、大規模災害やコロナ禍を経て、また人口減少を背景として、氏子崇敬者への教化活動や神社護持の資金調達に情報技術を活用する動きも生まれている。生成 AI の活用に関してはまだ実例が少ないものの、このような従来からの二方向と照らし合わせながら、現状を把握し、課題を考察する。

堀江宗正は「スピリチュアリティ実践者における生成 AI 利用の調査と分析」の題で以下の内容を発表する。近年、生成 AI を宗教的・スピリチュアルな実践に取り入れる事例が現れつつある。本発表では、主として占い師として活動するスピリチュアリティ実践者を対象に実施する調査研究をもとに、生成 AI がどのように利用され、意味づけられているかを分析する。なお、調査全体としては、宗教者、スピリチュアリティ関心層にもアプローチし、それとの比較でスピリチュアリティ実践者の特徴を明らかにする。生成 AI は単なる知識ツールとして用いられるだけでなく、対話相手、霊的ガイド、さらには超越的存在として理解される場合がありうる。そのような連続性があることを仮定しつつ、その利用形態の類型化を探索的に調査する。それによって、スピリチュアリティ実践がどのように変容しうるかについても考察する。

塩崎悠輝は「イスラームの教義回答（ファトワー）における生成 AI 活用の試み」の題で以下の内容を発表する。イスラームにおいて教義上の諸問題への回答は、イスラーム学者（ウラマー）の責務であるとされている。回答の典拠となるクルアーンとハディース、古典に精通していなければ、教義上妥当な回答ができないためである。同時に、諸問題の背景にある社会や科学技術への理解も必要とされる。現在、生成 AI の教義回答への活用は、道具として利用価値があるが、回答者の全責務を AI に委ねることはできない、という見解でウラマーはほぼ一致している。本報告は、専門機関や専門家の見解を基に、指摘されている生成 AI の問題点と、問題点を克服して積極的導入を試みている事例を検討する。

コメンテータの木村武史は、比較研究の観点から、各々の宗教のいかなる特徴が AI の価値判断に影響を与えているのかについて、質問を行なう。

国際委員会企画パネル

Teaching Japanese Religions to International Students

Convener：	KOBAYASHI Naoko	
What Happens When We Study Religion in Japan? Reflections from ISJP	Esben PETERSEN	(Kwansei Gakuin Univ.)
“Skeptics and Admirers”: Navigating Demographic Gaps in Teaching Japanese Religion	OMORI Hisako	(Akita International Univ.)
How to Spark Interest in Japanese Religions Across Diverse Classrooms	Tim GRAF	(Kanazawa Univ.)
Teaching Japanese Religions to International Students at the Graduate Level	Caleb CARTER	(Kyushu Univ.)
Commentator：	KOBAYASHI Naoko	(Aichi Gakuin Univ.)
Chair：	Caleb CARTER	(Kyushu Univ.)

Annual reports published by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) indicate that, as of 2025, there are approximately 2.6 million undergraduate students and 277,000 graduate students in Japan. Among the 2.6 million undergraduates, about 107,000 are international students, while 65,000 of the 277,000 graduate students are international students (Basic Statistics on Schools).

Given this situation, many universities have developed special programs for international students to deepen their understanding of Japanese culture and society. A number of institutions, for example, have established programs in international Japanese studies, global Japanese studies, or related fields. In some cases, these programs include courses on Japanese religions. Certain institutions also offer specialized programs dedicated to teaching Japanese religions to international students, such as the Ise and Japan Study Program, jointly organized over the past decade by Ise City and Kogakkan University.

In this panel, presenters from four universities located in different regions of Japan will share their experiences of teaching Japanese religions to international students within their respective programs. The panelists will introduce and discuss: (1) the background, history, and current status of their programs (Akita International University, Kanazawa University, NCC Center for the Study of Japanese Religions, and Kyushu University); (2) the characteristics of their students; (3) course content and pedagogical approaches; (4) teaching materials and technologies; and (5) insights and lessons learned.

The first presentation is by Esben Petersen, who coordinates the Interreligious Studies in Japan Program (ISJP), a semester-long academic program in Kyoto offered by the NCC Center for the Study of Japanese Religions, an institute affiliated with the National Christian Council in Japan. The program brings together students of theology, religious studies, and related fields for intensive engagement with Japanese religious traditions in both classroom and field settings. Participants take courses on Shinto, Buddhism, Japanese Christianity, new religions, theology in dialogue, and Japanese language, while also visiting religious sites and meeting with practitioners. Students come from diverse international and denominational backgrounds, creating a dynamic context for interreligious learning and dialogue. As coordinator, Petersen designs and teaches courses, organizes field trips, and accompanies students throughout the semester. He will share his experience teaching and directing ISJP, reflecting on the challenges and possibilities of teaching Japanese Religions to International Students in Japan.

The second presentation is by Hisako Omori, who teaches “Religions in Japan” at Akita International University. She argues that teaching Japanese religions in English in Japan has its advantages and drawbacks.

One thing that impacts her university’s classroom the most is the demographic traits of the students. As an institution that sends the entire cohort of students to overseas partner institutions every semester, a quarter of Omori’s student body is constantly made up of short-term exchange students. “Religions in Japan” is most popular among exchange students who admire a different outlook of religion from their own traditions, while the degree-seeking students are coming from a place of skepticism towards “religion” in Japan. During the fifteen weeks of learning, these two cohorts of students exchange their views, ask questions, and share their own stories of rituals, myths, and ways to mourn for the family and the collective. This paper illustrates that the diverse populations in the classroom present the instructor with challenges, as the knowledge each cohort of students has about Japanese religions differs, but the gap between the two cohorts of students and their interactions in class can yield the most fruitful results.

The third presentation is by Tim Graf, who has designed and taught courses on Japanese religions at universities in Germany, the UK, and Japan. By using film as a method, he has also been actively promoting the teaching of Japanese religions beyond the classroom. To overcome disciplinary boundaries and knowledge barriers in undergraduate education, he produces videos that aim to show how religious beliefs and practices in Japan today relate to global and local challenges and changes in society more broadly. The first part of Graf’s presentation will reflect on the application of this approach in courses on Japanese religions for Japanese Studies students in the UK, taught before and after their year abroad in Japan. The second part will focus on his current teaching as an Assistant Professor in International Studies at Kanazawa University. Besides teaching and researching religion-related topics, he serves as International Student Advisor, which involves a range of extracurricular activities, from planning a prayer room to organizing field trips for international students to temples and shrines on the Noto Peninsula.

The fourth presentation is by Caleb Carter, who teaches Japanese religions for two connected graduate programs—the International Master’s Program (IMAP) and the International Doctorate (IDOC) in Japanese Humanities—in the Faculty of Humanities at Kyushu University. He is one of five faculty in the program who each teach within their own specialization (religion, history, literature, art history, and visual culture). There are typically fifteen to twenty graduate students (almost all international) enrolled in the program as well as visiting graduate students and researchers. Each faculty member designs seminars for their advisees and other interested students, teaches a required survey course specific to their discipline, takes students into the field, and advises culminative research projects (theses and dissertations). Carter will share his experience teaching and advising for IMAP/IDOC as well as a course he teaches on Japanese religions to undergraduate students (in English) every other year.

Following these four presentations, Naoko Kobayashi, who has taught Japanese religious studies at a Japanese university for many years, will provide commentary as a discussant.

『神秘的経験の諸相』を読む

代表者：葛西　賢太
諸相がひらいた扉ーサイケデリック・ルネサンスの萌芽ー　葛西　賢太（上智大）
著者らは神秘的体験をなぜ、どのように科学したのか？　杉岡　良彦（京都府立医科大）
物理的状態として解明された宗教経験をいかに受け止めるべきか？　冲永　宜司（帝京科学大）
コメンテータ：村上　晶（駒大）
コメンテータ：柳澤　田実（関西学院大）
司会：葛西　賢太（上智大）

2026 年 2 月に刊行された、イエイデンとニューバーグ著『神秘的経験の諸相』（春秋社）について、訳者三名と二人のコメンテータにより、同書のもつ意義や可能性、課題について論じる。同書はウィリアム・ジェイムズ『宗教的経験の諸相』に対するオマージュでもあるため、邦題は「神秘的経験」としたが、以下では「神秘的体験」を用いる。

ジェイムズの研究は一世紀前のものだが、その後の心理学・精神医学による神秘的体験の研究にジェイムズが期待していた進展のうち、あることは実現し、他のことは今なお困難で、また方法論的に不可能であることがらも見えている。同書はその進展の状況をつまびらかにし、ジェイムズが提示した諸概念の多くが今なお有効であることを示す。また、ジェイムズが神秘的体験の心理学を形作る背景についても詳細に言及されており、人物研究としても興味深い。同書のもう一つの特徴は、多くのさまざまな神秘的体験をウェブ調査で収集するという、現代的な調査方法も用いて、神秘的体験の分析を行っていることだ。

著者のイエイデンは宗教学者で、多様な神秘的体験が人々の人生を大きく変えるような出来事に関心をもち、また、（厳格な管理の上で）サイケデリックス（向精神薬）を使用する精神医学や神秘的体験導入についての米国等の動向（サイケデリック・ルネサンス）を主導するひとりである。もう一人の著者のニューバーグの著書は多数邦訳があり、神秘的体験を研究する神経科学者としてすでに評価が高い。

本書は三つの部に分かれ、それぞれを訳者三名が担当したので、報告も担当部を中心に行う。葛西は第 I 部をとりあげ、現代に神秘体験を考える意義を再確認する。著者たちが行った神秘的体験のウェブ調査について検討する。また、本書で示されているジェイムズの心理学や『諸相』の現代なお色あせぬ価値、とくにサイケデリック・ルネサンスを踏まえて神秘的体験がどう捉えられるかを問いたい。

杉岡が論評する第Ⅱ部では、さまざまな神秘的体験が科学的手法に基づいて区別され、その各々について（1）ジェイムズの『宗教的経験の諸相』に基づく説明、（2）現代の心理学的研究、さらに（3）今日の神経科学的研究が具体的に取り上げられる。本発表では、引用された論文の元の画像やデータも示しつつ、再度著者らの主張に検討を加えたい。そして神秘的体験を科学することの意義について、医学の立場から率直な疑問を投げかけ、問題提起を行いたい。

冲永が論評する第Ⅲ部では神秘的体験を向精神薬や脳科学の観点から理解する際に生じる哲学的な問題と、宗教の本質となる超越性の問題を扱う。具体的には（1）向精神薬による体験と宗教体験との類似性、（2）向精神薬が脳に作用する化学的、脳科学的システムの詳細、（3）意識と宗教体験についての哲学的な不可知論の表明が主な内容となる。いずれも近年の自然主義的な研究方法に則りつつも、宗教の超越性に関しては原理的に不可知であることを論じている。

同書で扱うような神秘的体験の諸研究を渉猟し、ご自身も研究をしてこられたお二人をコメンテータとしてお迎えする。村上晶氏は調査地である青森県津軽地方で巫者などの神秘的体験の語りに触れてこられた。本パネルでは、日常的な宗教性に注目する近年の宗教研究の諸理論において神秘的体験はどのように位置づけられるのか、問題提起していただく。

柳澤田実氏はキリスト教思想を専門とし、近年は日米のキリスト教保守派の信仰を、心理学的手法を用い調査してこられた。本パネルでは、同書が神秘体験時の脳の変化として注目する前頭葉の活動低下の意味を他の研究も参照しながら再検討し、このエビデンスとそれに基づく議論が宗教理解にもたらす可能性を明らかにしていただく。

同書が触発してくれた神秘体験研究の意義や可能性、課題について、広く意見交換したい。

井筒哲学の比較宗教学的探究

代表者：澤井　義次
井筒俊彦とモッラー・サドラーのイスラーム思想　鎌田　　繁（東大）
井筒「東洋哲学」と鈴木大拙の禅思想　長岡　徹郎（阪大）
井筒俊彦と言語哲学　小野　純一（自治医科大）
井筒俊彦と宗教現象学　澤井　義次（天理大）
コメンテータ：鶴岡　賀雄（東大）
司会：澤井　義次（天理大）

本パネルは、「東洋哲学」構想で知られる井筒俊彦の哲学的思惟について、その思想構造と特質を比較宗教学的に探究することを目的とする。パネリストは、それぞれの専門領域における宗教思想を取り上げ、井筒哲学との比較検討をおこなう。本パネルでは、そうした比較宗教学的考察をとおして、井筒哲学が開示する思想構造の特徴を明らかにし、その宗教思想が内包する理論的展開の可能性を模索したい。このパネルでは、鎌田繁、長岡徹郎、小野純一、澤井義次の順で研究発表をおこない、コメンテータの鶴岡賀雄が研究発表についてコメントする。

まず鎌田は、17 世紀のイスラーム神秘哲学者モッラー・サドラーの思想との比較検討をおこなう。モッラー・サドラーについては、井筒俊彦の『存在認識の道』の日本語訳と解説を通して比較的よく知られている。この書からは形而上学的な思索をおこなう学者としてモッラー・サドラーは見られるが、全９冊からなる主著『４つの旅』に見られるように、彼の思索は理性知と伝承知を含むイスラームの学知のほぼ全体を含む総合的なイスラーム知を形成するものであり、井筒がとりあげたのはそのなかの一局面である。本発表ではモッラー・サドラーの思索の広がりを考慮して、「東洋思想」のイスラーム編を支える重要な思想家から、井筒が何をとりあげ何を捨てたかを明確にし、井筒の思索のもつ意味を考える。

次に長岡は、井筒俊彦と鈴木大拙を結ぶ接点として、禅とエラノス会議に注目する。井筒は 1967 年以降、日本人としては大拙に次ぐ二人目の講演者として同会議に招かれ、主催者から大拙の禅思想の解明を求められたこともあり、先行する大拙を強く意識しつつ禅を論じた。井筒のエラノス講演が「東洋哲学」構想の形成に深く関わったことを踏まえれば、大拙および禅思想との関わりは、井筒思想の展開を考えるうえで重要な契機であったと言える。そこで、エラノス会議における大拙から井筒への継承という観点から、両者の講演録を参照軸として禅思想の比較を試みる。そのうえで、井筒が「哲学的意味論」の視座から展開した禅解釈の特徴とその独自性について考察する。

さらに小野は、井筒が若い頃から言語学のほか、論理実証主義を含む分析哲学も取り上げ、同時に非アリストテレス的言語哲学も構想していたことに注目する。後年はイスラーム法学基礎論における非アリストテレス的言語行為論を取り上げようとした。この言語論は、比較研究や東洋哲学の構想を可能にする言語論の特性を持つと思われるが、その実態は明言されていない。そこで本発表は、井筒の残した言明から、非アリストテレス的言語論を浮き彫りにし、井筒の構想の独自性と意義に照明を当てる。そのことによって、彼の言語論は主客の成立を記述できることが分かる。結果として、井筒がこの事態を比較から提示し、記述する哲学言語を作ろうとしていたことを明らかにする。

最後に澤井は、井筒が東洋思想を哲学的意味論の立場から読みなおすことで、彼の言語分節理論を「東洋的現象学」として展開することを試みたことに注目する。その井筒が特に注目した宗教現象学者はルードルフ・オットーとミルチャ・エリアーデであった。彼らに共通した思想の枠組みは「聖なるもの」の体験知であった。井筒のオットーへの関心は、初期の著書『神秘哲学』から晩年の著書『意識と本質』に至るまで、井筒哲学を貫いている。また彼は 1967 年、エラノス会議でエリアーデと出会って以降、エリアーデのインド体験やヨーガ研究に関心を抱いていた。本発表では、井筒哲学と宗教現象学のあいだに見られる共通の思想構造とその特徴を明らかにする。

以上、４名の研究発表を承けて、コメンテータの鶴岡が、比較宗教学の観点からコメントをおこなう。各研究発表者がそのコメントに応答した後、全てのパネル参加者とともに全体討議をおこなう予定である。

〈憲法作者〉としての聖徳太子－日本宗教史の視座から－

代表者：オリオン・クラウタウ

親鸞と憲法十七条－その接点をめぐる問題－　遠藤美保子
批判の陰の称賛－近世人が読んだ太子憲法－　菊池　圭祐（國學院大）
憲法十七条と神道学－加藤玄智を中心として－　オリオン・クラウタウ（東北大）
日本画の聖徳太子像－旧最高裁壁画を中心に－　君島　彩子（和光大）

コメンテータ：佐藤　弘夫（東北大）
司会：オリオン・クラウタウ（東北大）

〈憲法作者としての聖徳太子〉という像は、現代日本の政治・文化空間に広く浸透しており、右派の論客のみならず、文部科学省検定済教科書においても一種の常識として定着している。しかし、このイメージがいつ、いかなる経緯で形成されたのかは、意外にも十分に解明されていない。本パネルセッションは、これまで古代・中世に重点を置きつつ、分野ごとに進められてきた聖徳太子研究を、中世から近現代に至る長いタイムスパンのなかで統合的に捉え直すものである。仏教・神道・儒教の各領域をまたぐ「憲法十七条」受容の諸相を、文字資料のみならず、物質文化的資料の精密な検討を通じて明らかにすることにより、日本宗教史研究に新たな視座を提供することを目指す。

第一報告である遠藤美保子「親鸞と憲法十七条」は、浄土真宗の祖師親鸞（1173-1263）と憲法十七条の関係を再検討する。親鸞の著作を通覧するかぎり、憲法十七条への言及はほぼ皆無であり、両者を積極的に結びつける解釈が前景化するのは、戦後の「護国思想論争」以降のことである。本報告では、親鸞作とされる聖徳太子関連和讃および真宗寺院に伝わる太子絵伝を主要史料として「憲法作者としての聖徳太子」像が鎌倉期の真宗においていかなる位相に置かれていたのかを検討し、近代以降の解釈との連続と断絶を照らし出す。

第二報告である菊池圭祐「批判の陰の称賛」は、近世における太子憲法の肯定的受容を論じる。朱子学者の林羅山や国学者の平田篤胤による批判が主に注目されてきた従来の理解に対し、山鹿素行『中朝事実』（1669 年）、甲賀順益『貴介問答』（1690 年）、多田義俊『半宵談』（門人・溪沢朝養の筆記により 1739 年成立）など、これまで十分に顧みられてこなかった肯定的言説を取り上げ、近世人が太子憲法をいかに読み、評価していたのかを明らかにする。批判と称賛の双方を視野に収めることで、近世の宗教／思想における太子憲法受容の複層的な実像を浮かび上がらせる。

第三報告であるオリオン・クラウタウ「憲法十七条と神道学」は、1912 年の明治天皇死去後に台頭した、十七条を帝国憲法の「精神的前駆」と位置づける言説に注目し、大正期の神道学者・加藤玄智の解釈の内容と思想史的意義を考察する。加藤は『神道の宗教学的新研究』（1922 年）において、十七条は仏儒的表現をとりつつも「神道」を内包していると論じ、それを、日本人にとって憲法の規定に先立つカントのいうような「ア・プリオリ的」前提として位置づけた。本報告では、この解釈が〈憲法作者〉としての太子像の近代的再編にいかに関与したのかを解明する。

第四報告である君島彩子「日本画の聖徳太子像」は、堂本印象（1891-1975）が旧最高裁判所大法廷のために制作した壁画《聖徳太子憲法御宣布》を中心に、近代以降の日本画における聖徳太子表象の意味を論じる。近代に成立した「日本画」というジャンルにおいて、聖徳太子は仏教興隆の祖であると同時に、日本文化や国家形成の源流を想起させる画題として描かれてきた。本報告では、戦後の司法空間に置かれた公共壁画という特異な文脈に着目し、太子と憲法という主題が、近代日本画と公共空間の交差点においていかなる意味を与えられたのかを考察する。

以上四報告は、中世・近世・近代・戦後という時間軸を共有しながら、それぞれの方法論から、〈憲法作者としての聖徳太子〉像の宗教史的展開を多角的に追うものである。コメンテータには、神仏習合、鎌倉仏教、死生観など、日本宗教史の広域にわたる研究を牽引している東北大学名誉教授・佐藤弘夫氏をお迎えし、各報告を総合する視点から議論を深めていただく。

更新される定義から考えるスピリチュアルケア

代表者：山本佳世子

到達点を想定しないスピリチュアルケアは可能か　山本佳世子（天理大）
四層構造で考えるスピリチュアルケア定義　谷山　洋三（東北大）
チャプレン兼臨床心理士が考えるスピリチュアルケアの定義　岩井　未来（龍大）
看護との差異から再考するチャプレンのスピリチュアルケアの定義　野口　恵子（救世軍清瀬病院）

司会：山本佳世子（天理大）

日本においてもスピリチュアルケアの議論と実践の蓄積がされるようになって数十年が経つ。この間、さまざまな理論やモデルが提示されてきたが、スピリチュアルケアとは何なのか、統一した定義は示されていない。これまで提示されてきたさまざまな論者によるスピリチュアルケアの定義を見渡すと、「結果重視の定義」と「プロセス重視の定義」がある。また、「ケア対象者の中で何が起こるのかを言語化する定義」と「ケア提供者の中で何が起こるのかを言語化した定義」がある。「スピリチュアリティ」を定義した上でスピリチュアルケアの定義を考えるものがある一方で、「スピリチュアリティ」には言及しないものもある。大村 (2021) は、スピリチュアルケアが「技法」を否定し、各人の人格・スピリチュアリティに依拠した「自由でゆたかなケア」であるがために、共通の定義を困難にしていると指摘する。確かに、これまで示されてきた種々の定義は、個々の論者の宗教的背景や死生観、臨床経験が色濃く反映されている。

スピリチュアルケアの定義を考えることは、「一般に通じる定義を考える」ことであるように見えて、「自身にとってスピリチュアルケアとは何かを考える」ことになる。スピリチュアルケアの第一人者である窪寺俊之は、その定義には「ケアの目的、内容、手段（方法論）、到達点」が含まれるべきだと指摘する。そうすると、その定義は自ずと、個々の論者の「自由でゆたかなケア」がどのようなものであるかを描き出すものとならざるを得ない。そしてそれは、定まったものではなく、ケア実践を積み重ねていく中で、否が応でも更新され続けていくことになる。

これまで「一般に通じる定義を考える」ことを目指すために「定義が定まらないことが課題だ」とされてきたが、「更新されていくものなのだから定まらなくて当然」なのであり、しかし、その更新されていくさまを言語化することで、スピリチュアルケアとは何なのかを示していくことができるのではないだろうか。本パネルでは、宗教的背景も、活動する現場やそこでの立場が異なるパネリストが、それぞれの考えるスピリチュアルケアの定義を提示し、なぜそのように考えるに至ったのか、それぞれの背景や立場等を踏まえて、それが更新されてきたプロセスとともに論じる。スピリチュアルケアが各人の人格・スピリチュアリティに依拠した「自由でゆたかなケア」であるならば、その個々の「自由でゆたかなケア」がどのようなものなのかを描き出すことでしか、スピリチュアルケアとは何かを示すことができないと考えるためである。

パネリストは以下の 4 名である。一人目は、無宗教者であり、公立の急性期病院のボランティアとして活動を続ける山本佳世子である。続く谷山の定義への違和感を表明することで、自身の定義を更新してきた。続いて、僧侶であり、スピリチュアルケア人材養成の場に長く身を置く谷山洋三が、山本からの批判を受けて、新たな定義を提示する。三人目に僧侶でありながら、周産期母子医療を中心としたキリスト教を背景とした病院で臨床心理士を兼任しフルタイムのチャプレンを務めた岩井未来が、目の前の患者との関わりの中でスピリチュアルケアの定義を更新し続けてきたことを示す。そして最後に、看護師として長く勤務した後に緩和ケアを中心とした病院のチャプレン（非常勤）に転向したクリスチャンの野口恵子は、定義を考えることは自らの実践の社会的責任を引き受けていくことだと指摘する。

4 人の発表を受け、それぞれの発表内容について相互にコメントを行い、さらにはフロアとも積極的に議論をすることで、スピリチュアルケアとはどのような営みなのかに改めて、迫りたい。

宗教文化と AI 利用－知識・言語・表現・語りの現在－

代表者：石田　友梨

テキスト化できない宗教文化の継承と AI　石田　友梨（岡山大）
消滅危機言語の宗教文化継承を支える AI 駆動型研究　宮川　創（筑波大）
宗教的レトリックの AI 生成を通じた新作能制作と文化教育の試み　永原　順子（阪大）
宗教文化・歴史をめぐる語り－自律化と人・AI 協働－　濱田　陽（帝京大）

司会：石田　友梨（岡山大）

１．企画の要約と意義

本パネルでは、AI 活用の広がりを宗教文化という視点から検討する。2022 年 11 月末の ChatGPT 公開以降、AI は急速に社会へ浸透し、ローマ教皇による AI 倫理への度重なる言及や、ブータン王国中央僧院による仏教対話 AI「ブッダボット」導入要請など、宗教領域にも影響が及んでいる。本パネルは、特定の宗教・宗派に限定されない、日常的で曖昧な領域としての「宗教文化」に着目し、社会における AI 活用の実態を追うことを目的とする。その意義は、日常の行動様式や無意識の習慣、そこから立ち上がる価値観に AI がいかなる変容をもたらしているのかを明らかにする点にある。聖典や儀礼といった制度的側面から離れ、草の根的な実践に目を向けることで、今後の AI 活用の方向性を考察したい。具体的には、電子テキスト化が困難な言語や音楽に関する宗教文化の継承、言語多様性を支えるコーパス（データベース）構築とその応用、宗教文化をふまえた伝統芸能への AI 導入事例、さらに AI との協働が宗教文化や歴史叙述にもたらす影響へと議論を広げ、多角的な視点から未来像を展望する。

２．個々の発表内容

石田友梨は、テキスト化が困難な宗教文化をいかに継承していくかという課題について検討する。現在広く利用されている AI は、質問に対して応答を返すチャット形式が主流であり、その基盤にはテキストデータが大きな比重を占めている。そのため、言語化が難しい知識や、技術的制約によって電子テキスト化が困難な言語に関する知識は AI に反映されにくいという問題がある。本発表では、テキスト化が難しい宗教文化の具体例として音楽に着目する。とりわけ、イスラーム教に関連するクルアーンの読誦と、道教と関わる古琴の奏法を取り上げ、これらの継承における AI 活用の可能性と課題を考察する。

宮川創は、石田の提示した文化多様性の維持のためのひとつの解決策として、AI を活用した各言語の研究事例について紹介する。古代末期キリスト教のコプト語修道文献コーパスにおけるコプト語聖書翻訳からの引用検出などの間テクスト性検出、日本語・琉球語・アイヌ語の聖書翻訳パラレルコーパスの作成といった研究と、これらの研究成果の活用方法から、地域や時代を超えた文化の継承について提言する。

永原順子は、AI による新作能の詞章制作を、現代の学生が日本人の精神構造を学ぶ「宗教文化教育」の場として捉え、その有効性を検証する。能楽は仏教、神道、アニミズムなどが多層的に混在する「信仰の結晶」である。本研究では、和歌、説話、仏典等の膨大かつ多様な古典データを AI に参照させ、学生が提示する素案を能の形式へと変容させるプロセスを分析する。AI が提示する「もっともらしい宗教的言説」と、人間が抱く「切実な信仰心」の境界線を意識することで、学生たちは伝統的な無常観や鎮魂の思想をいかに再発見しうるのか。AI を単なる「高度な検索・編集ツール」に留めず、自らの文化的アイデンティティを照射する「鏡」として活用する、新しい人文学教育の可能性について、分析途上の知見を交えて報告したい。

濱田陽は、本テーマを宗教文化・歴史の語りの問題へと接続し、生成 AI のエージェント化がもたらす変容を検討する。生成 AI は、人間による利用や補助の範囲を超え、語りの生成・編集・継承へ関与する機能をすでに持ちはじめており、その作用は今後さらに拡大すると考えられる。本発表では、現在の技術動向と近未来的な展開可能性をふまえ、宗教文化や歴史をめぐる語りの実践における AI との協働可能性を手がかりに、語りの自律化と人・AI 協働の関係に注目する。特に、解釈、記憶、継承が AI とともに担われるとき、語りの主体性と責任がどのように再編されるのかを考察し、他分野における AI 活用との比較も視野に入れつつ、宗教文化・歴史領域における人・AI 協働の特徴と含意の一端を明らかにしたい。

日本の近現代の巡礼から「衰退」の言説を再考する

代表者：ケイレブ・カーター
明治時代における太宰府天満宮の参詣講の断絶と再生　ヤン・ハウスマン（九大）
近代の誕生、現代の復活－「聖地巡礼」現象の構築過程を中心に－　ラディティヤ・ヌラディ（国立歴民博）
御嶽山における持続可能性の模索－御嶽講と現代登山の共存－　小林奈央子（愛知学院大）
文化財は巡礼の衰退の原因？－千社札の事例をめぐって－　ケイレブ・カーター（九大）
コメンテータ：浅川　泰宏（埼玉県立大）
司会：小林奈央子（愛知学院大）

柳田國男が近代化の進展の中で日本がその伝統を失いつつあると嘆いて以来、「衰退」は日本の文化的実践をめぐる持続的な主題であり続けてきた。民俗宗教や修験道などの分野における研究は、しばしば前近代的過去へのノスタルジーを帯びている。人類学者たちは、人口減少や地方の過疎化といった人口動態の傾向が、祭礼や工芸の継承、さらには農村部の寺社に対する檀信徒・氏子の支持の維持を脅かしていると指摘してきた。他方で、野家啓一、Marilyn Ivy や近年の村上晶らが論じるように、衰退は単なる現象にとどまらず、一つの文化的ナラティヴとしても構築されている。さらに宗教研究の領域においては、世俗化をめぐる近年のセキュラリティ研究（Charles Taylor、Talal Asad、Jason Josephson-Storm 等）からの批判にもかかわらず、Weber の世俗化の論はいまだ大きな影響力を保持している。

これらの研究領域は宗教的衰退という主題を検討する上で重要な基盤を提供する一方で、いくつかの喫緊の問いを提起する。すなわち、上記の要因を超えて、いかなる別の衰退要因が見出されうるのか。衰退言説と実践の実際の衰退との関係はいかなるものか。さらに、衰退という枠組みを越えて、再生や変容などをいかに組み込み、より包括的な像を提示しうるのか。本パネルでは、明治時代から現代に至るまでの様々な事例研究を通じて、これらの問いについて考察する。

以下、各発表者の発表概要を述べる。

ハウスマンの発表は、太宰府天満宮の参詣講における組織的・信仰的な「断絶と再生」を論じる。明治時代、天満宮の参詣講制度は、神仏分離や社家の解体など、多くの断絶を経験した。そこで、参詣講は社務所直轄の「飛梅講社」として再生された。しかし、当時、神社は国家の祭祀機関であったため、この再生には国家との交渉も必要であった。したがって、太宰府天満宮の参詣講の事例は、衰退、断絶、再生の過程における参詣者、宗教施設と国家との複雑な関係を示している。

ヌラディは、昭和初期の皇陵巡りや現在のアニメ聖地巡礼などを事例とし、戦後の聖地巡礼の突然な断絶と現在の再生を考察する。とりわけ、「聖地」の構築過程を中心に、旅行業界、交通手段の発展、そして「感情」といった要素の影響に着目する。聖地巡礼の近代の起源であるメッカ巡礼など、海外巡礼を指す単語から、国内の皇陵やアニメの聖地を指すように至る過程には、「日常」から「非日常」へ、「俗」から「聖」への変質が見られる。本発表では「聖地」という言葉の変質を追っていく。

小林は、木曽の御嶽山を霊山と崇め参拝する御嶽講の変遷について「衰退・断絶・再生」に着目しながら考察する。御嶽山では今まで地震や噴火などの自然災害によって衰退や断絶を経験してきた。現在は、2026 年 4 月に御嶽山が国定公園化し、優れた自然環境や景観的価値が評価され、御嶽山の魅力に人気も集まっているが、宗教的に重要な拝所への一般登山者の立入りなど、信仰者と非信仰者との間での感覚や意識のズレによる軋轢なども起こっている。「持続可能な」登山あるいは山岳信仰を目指す上でどのような可能性と課題があるのか検討する。

カーターは、日本における巡礼の未だ注目されていない側面、すなわち 18 世紀半ばにさかのぼる「千社札」の現代的衰退を考察する。ここではその主要因を、遺産の物質的な側面を優先し、巡拝者の信仰や実践の側面を相対的に軽視する「社寺の文化遺産化」という価値観の転換にあると指摘する。本発表では、千社札の衰退の背景にある、「文化遺産化」の価値観の転換がもたらした、より広域的な影響について議論する。

以上 4 名の発表を受けて、浅川泰宏が日本の巡礼研究および巡礼に関わる物質文化研究の観点からコメントする。

宗教（史）観の戦中と戦後－キリスト教・真宗・禅と「日本」－

代表者：飯島　孝良
「無教会主義」の変容－藤田若雄らによる矢内原忠雄批判の射程－　赤江　達也（関西学院大）
植村海老名論争の語りと系譜－戦後日本における神学傾向の変遷－　三輪　地塩（同志社大）
戦争の歴史化と教団改革運動－真宗大谷派と靖国問題－　宮部　　峻（関西大）
戦中から戦後の禅思想－市川白弦の戦時体制批判と「剣禅一如」－　フィリッポ・ペドレッティ（駒大）
コメンテータ・司会：飯島　孝良（花園大）

いわゆる「戦後歴史学」は、自律的主体としての「民衆」を重視するものであり、それが戦前の国家＝天皇中心の歴史観を反省するものと位置付けられてきた。この「戦後歴史学」が五〇年代の対米意識と世界的な「民族独立」的動向と呼応した「国民（史）」へ問いを向けつつ、明治以来の日本国家（観）へ反体制的な批判を展開しながらも、最終的に「日本」という主語で国民国家を語るものとなったとも批判的に回顧されている（歴史学研究会編『戦後歴史学再考』二〇〇〇、同編『「戦前歴史学」のアリーナ』二〇二三）。こうした中、戦中の歴史家や思想家や宗教研究者における皇国史観との向き合い方、或いは戦後世界における天皇の位置づけ方、ひとつの宗教の歴史観からの「大東亜共栄圏」の捉え方などを、単に「戦時中の遺物」として唾棄するだけでは、ことの実相を捉えたことにならないのではなかろうか。むしろ、それらを戦後に“反省”するにしても、その反省すべき問題が具体的にどのようなものであったのか、現代の視座から冷徹に捉え直す必要がある――このパネルでは、そうした戦中から戦後という激動の時代にあって、「日本」という枠組に関連した宗教（史）観がどう変遷したか、これを批判的に再検討する。

赤江達也の発表では、無教会伝道者・労働問題研究者の藤田若雄を中心とする共同研究グループが一九六〇～七〇年代に行った無教会キリスト教の社会思想史的研究を検討する。内村鑑三の宗教思想運動を継承した無教会第二世代は、矢内原忠雄を筆頭に戦時期の批判的言論で名高い。だが、矢内原に師事した藤田若雄は、矢内原ら第二世代による「日本的キリスト教」という「無教会主義」理解を批判した。本報告では、藤田若雄らの共同研究にみられる「無教会主義」理解を「市民的キリスト教」と捉え、その意義・限界・射程を明らかにする。

三輪地塩の発表では、一九〇一年に行われた植村海老名論争の言説形成過程を検討する。当該の論争が日本キリスト教史の一部として語られるのは一九三〇年代以降であり、後年、勝者／敗者の二項対立的な形で表象されるに至った。「植村勝利論」は一九六〇年代から七〇年代にかけて形成されたと考えられ、石原謙や熊野義孝ら、後のキリスト教界の権威となる神学者らによる再評価がその端緒となった。本発表では、戦後罪責告白や靖国神社法案反対運動といった戦後日本キリスト教を画定していく出来事や諸事象があることを指摘し、神学史的な変遷を明らかにする。

宮部峻の発表では、真宗大谷派の改革運動と靖国問題の関係に焦点を当てる。戦中から戦後、真宗大谷派では信仰運動にもとづく組織改革運動が展開されてきた。改革運動の主な担い手は、清沢満之のいわゆる「近代教学」の影響を受けていた。靖国神社の国家護持の動きに対し、真宗大谷派は反対を表明する。その理由は、当初、信教の自由の観点からなされていた。しかし、靖国問題の歴史的検討がなされるにつれ、近代教学に内在する問題が指摘される。本発表では、靖国問題を通じて改革運動の歴史化が進むと同時に、靖国問題への取り組みが信仰運動と組織改革運動を駆り立てる過程を明らかにする。

フィリッポ・ペドレッティの発表では、戦中から戦後における禅思想――とくに市川白弦の戦時体制批判と「剣禅一如」を分析する。戦時中の仏教徒の責任を批判したことで知られる市川白弦は、戦中から戦後に沢庵を論じているが、市川が「剣禅一如」といった概念を軍国主義的に利用する仕方を批判していることがみえてくる。市川は、いわゆる認識論的批判を用い、「剣禅一如」という概念を風流の一形態と見なすに至る。そして、沢庵論の最深部を再検討し、市川が平和主義的な立場から評価すべきことを提案している点を論じていく。

以上の発表のあと、パネルの企画者である飯島孝良からコメントし、フロアとの質疑応答を経て、発表者四名がリプライする。

ユニヴァーサリズム的霊性思想運動とアジア主義

代表者：荘　千慧
海を渡った太霊道－近代中国における民間精神療法の展開－　栗田　英彦（愛知大）
「満洲国」と中華民国の宗教政治史－道院・世界紅卍字会の活動－　玉置　文弥（日本学術振興会）
「国際協力」とアジア主義－近代上海神智学運動の事例から－　荘　千慧（神戸女子大）
コメンテータ：島薗　進（大正大）
司会：荘　千慧（神戸女子大）

本パネルは、近代東アジアにおける太霊道・道院・神智学といった霊性思想の展開を、「普遍宗教」「東洋」「文明」「国際協力」「アジアの連帯」などの共有された語彙・概念の連関に注目し、再検討することを目的とする。従来の研究では、上記の諸運動はそれぞれ独立した対象として論考されてきた。本パネルでは、これらの運動が同時代において、類似した理念的語彙を用いながら、宗教・思想・政治の領域を横断して展開していた点に着目する。

とりわけ重要なのは、これらの運動がいずれも越境的な広がりを持ちながら、ユニヴァーサリズム的な思想を掲げていた点である。こうした霊性思想運動は、植民地支配の圧力に直面していた近代東アジアにおいて展開する中で、日本のアジア主義のような政治的対外進出とも接続していった。本パネルは、このような歴史的文脈における理念と実践の交錯を、具体的な事例に基づいて検討する。

栗田発表では、普遍主義的宇宙論を備えた大規模な霊術団体・太霊道に焦点を当て、日本の民間精神療法の中国への導入を検討する。栗田は本年 3 月の上海図書館の調査において、1920～30 年代の中国で刊行された太霊道や民間精神療法の翻訳書を新たに発掘した。従来、辛亥革命期に太霊道創始者の田中守平が渡中して活動したことが指摘されていたが、満州事変以降の中国への拡がりについては知られていなかった。日本ではこの時期に太霊道は衰退し、一方で霊子術はその後の外気功に影響を与えたという説もあり、その実態の解明も必要である。新資料の分析によって、当該期の太霊道・民間精神療法の中国導入の内実とその歴史的・社会的背景を探り、特に日本のアジア進出やアジア主義運動との関連について考察する。

玉置の報告では、中国の「民衆宗教」道院・世界紅卍字会を取り上げる。道院は 1916 年頃、山東省での扶乩によって始まり 1921 年に済南で正式に発足した。政治的には「満洲国」建国運動にも参画し、建国後は政府の保護・支援のもと全土に組織を拡大、「民心安定」を担う教化・慈善団体として活動した。この「宗教政治運動」の、特に「満洲国」と中華民国に跨って活動していた期間に着目することで、両国間における政治的立場の矛盾や、アジア主義・超国家主義ともかかわりながら展開された普遍主義的宗教思想による政治状況の「読み替え」を検討する。その際、「満洲国」や中華民国で発行された一般紙や、道院の機関紙誌、公文書を使用することで、その活動実態を実証的に明らかにし、従来等閑視されてきた両国間のはざまにおける宗教政治史を浮き彫りにしたい。

荘発表では、西洋伝来の神智学運動を取り上げる。神智学は、普遍的同胞愛の実現を重要な理念として掲げた霊性思想運動であり、本発表では、1920 年代から 30 年代初期の上海におけるその展開を対象に、「国際協力」とアジア主義との関係を再検討する。インド人神智学徒 H.P. シャストリーと、彼と連携した日本・中国・インドの知識人らの活動に着目し、1924 年に彼らが上海で設立された大亜協会を中心に、それぞれの活動の広がりと相互関係を究明する。とりわけ亜細亜民族会議・中国全国道路会・国際連盟との接点を検討し、これらを神智学を媒介とした越境的連携として捉え直すことで、近代東アジアの知識人における「国際協力」とアジア主義のあいだにある認識と実態のずれを明らかにする。

なお、本パネルでは各発表を単に個別事例として提示するだけのものではない。島薗コメンテータによる総括的な問題提起を通じて、それぞれの事例を横断する共通の問題系の明確化を図り、近代東アジアにおける宗教・思想・政治が交錯する「場」として捉え直すことを試みる。これにより、従来の宗教史・思想史・政治史といった分野区分では十分に捉えきれなかった知的・実践的ネットワークの実態を浮かび上がらせることを目指す。

信仰の内と外の対話－当事者性と公共性のあいだ－

代表者：溪　英俊

多元化する「信教の自由」－公共空間への視座－　斎藤　謙次（松緑神道大和山総合研究所）
浄土真宗における公共性の論理－当事者性と社会－　溪　英俊（龍大）
戦後日本の宗教規制再考－1950 年代の動向を中心として－　隈元　正樹（新日本宗教団体連合会）
宗教者における信仰継承と現代社会との関わりについて　菅野　龍清（日蓮宗現代宗教研究所）
コメンテータ：弓山　達也（東京科学大）
司会：溪　英俊（龍大）

本パネルは、宗教教団や諸宗教横断組織に属する研究者が、自らの信仰や所属と学術的視座との往還を通して、現代社会における宗教の位置を再考することを目的とする。

教団付置研究所懇話会・宗教間対話研究部会の有志は、これまでカルト問題や不当献金、旧統一教会の解散命令といった社会的課題に対し、主として宗教教団の側から応答する枠組みを検討してきた。

今回は、そうした応答の前提となる「信仰の内」と、それを取り巻く「外部社会」との関係性そのものに焦点を当てる。すなわち、信仰を生きる当事者の経験や確信はいかにして公共的言説へと開かれうるのか、また外部からの批判や規範はいかに自らの信仰と接続しうるのか、という問題である。

研究部会における継続的な活動の蓄積を背景として、単なる立場表明にとどまらず、宗教間対話の実践知を踏まえた相互批判的対話を試みる。それにより、宗教の当事者性と公共性のあいだに横たわる緊張関係を可視化し、宗教と社会の新たな関係構築に資する視座を提示したい。

（斎藤）近年の宗教間対話と震災ボランティアの事例をとおして、日本社会において「信教の自由」が多元化しつつあることを考察する。発表者は、教団付置研究所懇話会（付置研）の宗教間対話研究部会（研究部会）に所属。付置研は宗教教団が付置する研究所の横断的組織で、「宗教性の復権」に関する研究が主な目的。現在 29 研究所・団体が参加。研究部会は付置研のサブグループで、宗教間対話のあり方と実際を研究。

多元化する社会のなかで、「信教の自由＝信じることの自由」が個々人と深くかかわりながら、地域・社会＝公共空間と関係性を有しつつあることを問いたい。

（溪）浄土真宗における公共性の論理について、信仰を生きる当事者の自己理解と社会との関係性を中心に検討する。特に、明治・大正期の近代化過程において展開した仏教青年会運動や婦人活動などに着目し、宗教的実践がいかに社会的領域へと開かれていったのかを帰納的に考察する。そのうえで、自己理解や自己相対化の視点を踏まえ、浄土真宗における公共性の特徴について検討したい。

（隈元）オウム真理教や旧統一教会の事件などにより、「信教の自由」（主に内からのまなざし＝当事者性）と宗教活動規制（外からのまなざし＝公共性）が注目されている。発表者の所属する新日本宗教団体連合会（新宗連）は、戦前のいわゆる「宗教弾圧」を直接・間接に経験した新宗教の諸教団が、宗教協力（≒宗教間対話）を通して「信教の自由」を守っていくことを主要な目的として結成された（宗教界の自浄努力を含む）。戦前のような当局からのあからさまな宗教弾圧はなくなったが、世論を背景とした立法行政や取り締まりの現場において、その危険性は本当になくなったのか。1950 年代の動向を振り返り、改めて検証してみたい。

（菅野）宗教 2 世という言葉は信仰者第 1 世代から第 2 世代、第 3 世代に信仰の継承が行われているか否かという点で話題となることが多い。しかしこの言葉が世に現れて以降、発表者が所属する日蓮宗における宗教 2 世、すなわち宗教者の 2 者間（師弟・親子）における信仰継承という課題を浮かび上がらせた。さらにこの課題は、特に近世までの宗派を継承する仏教教団の場合、寺院の継承という問題とも密接に関係している。一方で例えば寺院等の宗教施設が従来の檀家等、特定宗教施設における固定メンバーの利用に資するだけでなく、広く日本社会、地域コミュニティーに対する利益供与に積極的になったり、あるいは新たな役割について模索する動きも増えてきている。今回の発表では宗教者における信仰継承という課題、また宗教者や宗教施設が社会にどのようにアプローチしているかについて報告したいと考えている。

（弓山）宗教社会学者の視点から、コメンテータとして各発表者のパネルにコメントを行う。

谷口雅春の実相哲学の内包と外延

代表者：喜多　源典
谷口雅春の神癒言説とその継承－徳久克己を中心に－　寺田　喜朗（大正大）
谷口思想の外延的展開－翻訳書含む思想環境と精神世界との交差－　伊藤耕一郎（関西大）
実相哲学の特質と救済論的展開－榎本恵吾の『原案』を中心に－　喜多　源典（関西大）
コメンテータ：對馬　路人
司会：寺田　喜朗（大正大）

本パネルは、生長の家創始者・谷口雅春の実相哲学を再検討することを目的とする。昨年のパネルは、谷口の実相哲学と彼の実存的経験の内的連関を検討することを主眼に、資料的には主に谷口の著作群から接近することを試みた。今回はこの問題意識を継承しつつも、多岐にわたる谷口の思想が、生長の家という教団の内外でどのように展開し、継承され、あるいは取捨選択される形で受容されたのか、その内包と外延を検討することをテーマとする。

谷口の思想については小野泰博・島薗進等の先行研究があるが、依然、検討の余地を大きく残している。彼独自の実相哲学は、主著『生命の実相』のみならず、仏典・聖書・記紀の解釈書、ニューソートや精神分析学をはじめとした翻訳書、あるいは子育て・夫婦問題などの家庭指導書、文学・教育・政治に関する提言・評論など様々な媒体において披瀝されている。今回のセッションでは、「奇跡の神癒」とよばれる病や諸種の苦難からの救いをめぐる教説に焦点を当て、その思想の含意ないし内包および外延を谷口とその継承者の具体的な言説から検討してみたい。

寺田発表では、先行する谷口雅春研究をレビューすると共に、生命主義的救済観や心理療法的救いの思想などの鍵概念の含意と射程を検討する。さらに谷口の説いた救済思想が、教団内の他の布教者によってどのように解釈・継承されていたのか、徳久克己という中核的な指導者（本部講師・元理事長）を事例にしながらその力点ないし重点を見ていきたい。

伊藤発表は、谷口雅春の思想が教団外へ展開する外延の一側面として、日本教文社による翻訳書を含む思想環境に着目し、その受容のあり方を検討することを目的とする。谷口の実相哲学は『生命の実相』をはじめとする著作によって体系化されているが、同時に、日本教文社による出版活動の中では、ニューソートのみならず、ユングをはじめとする心理学、宗教経験論、成功思想なども翻訳・紹介されていた。これらは、教団内部のみならず、教団外の書籍流通網の中でも読まれうる状況に置かれており、後のニューエイジ／精神世界とも連続しうる知的土壌を形成していた可能性がある。本発表では、ラーソン『ニューソートその系譜と現代的意義』等を手がかりに、日本教文社の翻訳書群が、教団内部の理解とは異なる文脈において受容されうる思想環境を形成していた点を検討する。以上から、本発表は翻訳書にみる「思想環境における外延的展開」の一端を示し、喜多発表において検討される主流的説法と榎本独自の説法をめぐる思想的背景の一側面を考察するものである。

喜多発表は、教団・本部講師であった榎本恵吾の著作『原案』等を中心にしながら谷口実相哲学の主流的説法と榎本独自の説法を逆照射する形で検討することを試みる。戦後の生長の家は、教団の拡大過程において浄心行や先祖供養等の「方便的説法」が徐々に前景化し、初期の「純粋教学」が周縁化する変容を遂げた。こうした教団史的文脈に対し、榎本は一貫して根本教義としての＜実相哲学の純粋性＞を探求し続けた人物であり、教団内では一定の熱烈な支持者を有すると共に特異的存在でもあった。本発表ではさらに、生命主義的救済観における教えと具体的な規律・実践の特徴を榎本の説法とを突き合わせることを通じて、生命主義的救済観を内在的に再検討する試みも行いたい。

これら 3 発表を踏まえ、コメンテータの對馬路人氏から新宗教研究の研究史と生命主義的救済観という観点からコメントを受ける。今回のセッションが、生長の家および新宗教研究に対して有する意義、ならびに今後の研究の課題と可能性についてフロアとともに議論を交わしたい。

2026 年 7 月 6 日発行
編集・発行　日本宗教学会　第 85 回学術大会実行委員会
HP：https://jpars.org/conference/